

---

# **ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～**

天笑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

### 【NNコード】

N0115Y

### 【作者名】

天笑

### 【あらすじ】

兵藤一誠に憑依？転生？をしてしまった俺。  
ちょいとばかし神……という名の変態から特典も貰つた。  
しそうがない。  
頑張つて生きていきますか～。

この作品はエロ5・ギャグ2・バトル2・シリアルス?1の割合で  
提供します。

そして主人公最強、ハーレム、主人公無双、変態仮面は無敵、等々  
色々なカオスが含まれていますのでそれらが嫌な方は読まない方が  
良いです。

## 神……だと？（前書き）

作者は勢いだけで書いてます。  
ご都合主義やら適当な箇所がありますが、生暖かい目で見守つて下  
されば嬉しいです。

それでは始まります。

クロスアウツ！

神……だと？

「気がついたか？若人よ？」

目の前の人物？はそう言つてきた。

だが！！

俺はまた目を閉じた。

（うん。悪い夢だ。

うん。俺は何も見なかつた。

うん。目が覚めればきっと輝かしい朝陽が俺の視界を照らしてくれ

る。

うん。間違いない。

うん。

うん。

俺の

視界に

ブリーフー工で

女性の下着を

被つた

変態仮面なんて見なかつたんだ！－－－（）

「残念ながら現実だ。若人よ。さあ股間（私）を見ろ！－（クイツ、クイツ」

凄まじい悪寒を感じた俺は即座に意識を浮上させ、某エクソシスト  
に出てくる奴もビックリな動きで後退した。

後退した時に「ウホッ！？イイ動き」なんて言葉は俺の耳には入  
つてきてない！

「（クイツ、クイツ」

「…………（ゴクリ。」

俺は態勢を整えた後、奴と対峙する。

股間を突き出し腰を揺らす奴。

奴の顔面には女性の白の下着（リボン付き）がジャストフィットティング。

あえて言おひ。

……………すゞく…………変態です。

対峙して2時間経つた。

変態仮面が現在の状況を教えてくれた。（腰を揺らしながら）

奴は神様らしい。

そして俺は死んだらしい。

まあ死んだ時の記憶がフラッシュバックしてきたから俺は死んだの  
だろう。

だが！

それより！！！

何よりも！！！

変態仮面が神様だということを！！！  
認めたくなかった！！！！

俺は認めたくなかった！――――

大事な事なので2回言つた。

話が進まないので、それは置いておこう。

まあ死んだ俺が何故変態仮面と対峙しているかといつと

「転生……だと？」

「うむ。 そうだ。（クイツ、クイ」

「死んだら普通に転生するんじゃないかな？違つか？（ウブツ。 気持ち悪い。」

「ああ、それはだな……カクカクシカジカ……だ。（ハアハア、あの蔑んだ視線と怯えたような視線が混ざった感じ……タ・マ・ラ・ナ・イ）」

変態仮面の言う事を纏めると

変態仮面が仕事中にミスをした。（ミスの内容は聞いたら嫌な予感がしたのでスルーしたぜ）

そのせいで俺死んだ。

現在に至る  
らしい。

お詫びに特殊な転生をプレゼンツフォーユー

まあテンプレ……なら女神とか出てきて欲しかった……がそこは諦めよ。

「どんな世界に転生出来るんだ？」

「ふむ。私の管理する世界で「ハイスクールD×D」という世界だね。（クイッ、クイッ）

「…………まあいいや。色々聞きたいけど、聞く気が失せる。」

ハイスクールD×Dね…………一步間違えたら死亡」フラグ一直線だな。

「で？特殊な転生ってのは？」

「何か力をプレゼンツしよ。」

「力…………ねえ。あんま思いつかんなあ。」

「そつかね？ふむ…………なら、キミが生前夢中になつてプレイしていたゲームの力を幾つか上げよう。勿論、選んでくれて結構。それから全ての才能で限界突破付き。生前の経験、知識付き。他は…………」

変態仮面が次々と付けていく。

長々と付けていつてる所を俺はストップさせた。  
余計な力を貰つたら死亡フラグ一直線だからな。  
そして纏めると

- ・俺が選んだあのゲームの力を4個ぐらい。
- ・全才能限界突破

- ・ある程度?の肉体強化及び魔力・氣力付与
- ・生前の知識・経験

ぐらいか。

「むうう。まだ付けたりんが仕方ない。本人の希望だ。（まあ後付けしたらよいか）では、以上で構わないか？（クイツ、クイツ」

「ああ、いい。だから早く転生させてくれ。……もう色々と限界だから…………。」

「では、送る。ああ、そうだ。ちなみに原作破壊とかしてくれてもよいからな。（クイツ、クイ）

何せキミは主人公に転生するんだから（クイクイツ、クイクイツ、クイクイツ、クイクイクイツ）

変態の腰の動きが激しくなつてきたと同時に俺の足元が光り始めた。  
……つて、何？

「おい！？今なんシヨルツは？」

足に何か……繩？

「では良き人生を！

フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

変態仮面が叫び出したと同時に繩が上に引っ張られて……つて！?  
これは！！

「まさかの逆バンジイイイ—————」(ギリギリ)

こうして俺は転生した。

ハイスクールD×Dの主人公、兵藤一誠に。

ゼウシヒツなつたらおん

神……だと？（後書き）

田指廿

頂点！

変態のな！

主人公設定……かな（前書き）

相も変わらず適當な設定でごめんなさい

## 主人公設定……かな

兵藤一誠（転生∨eʳ）

変態仮面により転生？させられ兵藤一誠となつた。

転生する時に変態仮面と遭遇してしまつたので女体が恋しくなり若干？変態化した。

おっぱい超大好き。

おっぱい以外も大好き。

やる時はやつてくれる男の子（色々な意味で）。

能力

1) スパロボOGsのアルトアイゼン・ヴァイスリッター・アンジユルグ・ソウルゲインの機体に換装できる能力

2) 変態的な肉体能力と魔力

3) 生前の知識や経験（原作知識含む）

4) 全才能限界突破

5) ???化

6) 赤龍帝の籠手

1) 機体換装能力については神滅具並みの力。

赤龍帝の籠手との併用で強化可能。物語が進むにつれ新たな能力を載せていきます。

全て神（変態仮面）により魔改造化。  
ただ機体色は全て赤。

2の肉体・魔力は変態仮面基準で付けてしまったのでかなり強し。

補足？

主人公の元いた世界はハイスクールD×Dの世界より上位の世界に位置している為、その上位世界である神（変態仮面）から付与された機体能力・変態的肉体能力・魔力等は特別なので悪魔の駒に影響しないし、この世界の者達に閑知もされない。ただ自分の相棒となるドライグには後々機体換装能力に関して説明しようと主人公は思つてている。

## 主人公設定……かな（後書き）

機体に関しては作者の好み。

アンジュルグ、ヴァイサー、ガとソウルゲインに関してはおかしいだろー！というのは勘弁してください。  
つていうか色々勘弁してくだされば嬉しいです。

さて次は

キング・クリムゾンしていくぞ！

てへ

れぬ、ぬけを纏でよひはなにか（前書き）

久々のD×D投稿。

待っていた方がいるかはわかりませんが、お待たせしました。

後、この作品のタイトルは現在（仮）です。  
表記するのを忘れてました。

すいません。

しばらくはこれでいきますけどね。

とりあえず……早速原作ブレイクしてみよう。

どうぞ

まあ、ぬけを愛でようではないか

皆さん！」とにぎりま。

兵藤一誠に転生してはや1~2年。

俺は現在小学6年生。

今日も未来に向けて頑張つて体を鍛えます。  
ただね

『相棒。今日は修行をしないのか?』

『あ～……今日は体を休める日にしてく。そこそこ強くなつただろ  
うし。』

今の会話は頭の中？かな。  
そんな感じで話してるんだけど…………。

まあともかく原作同様に『赤龍帝の籠手』も付いてきましたよ。  
5歳ぐらいから体を少しずつ鍛え始め、8歳ぐらいの時に赤いドラ  
ゴンが何か夢に出てきたから、もしかしてと思い起きた時に心の中  
で『お～い』と呼び掛けたら……反応したんだよね、ドライグが。  
ドライグの方も何か驚いてたが。

驚いた後に我に返つたドライグは何か偉そうな口調で

「俺に気づくとは大した者だな。小僧。」

とか何とか言つてきたからイラッとした俺は思わず

「あ、悪い。今、口本見てるから後で。じゃつ。」

つて言つて、シャツ脱ぎながらしゃがんだ。

シャットアウトする時に「ちょっ、待て」とか聞こえたけど勿論、無視。

その後も何かずっと話し掛けてきてたけど勿論俺は無視。

最後の方になつてくると

「俺の話しを聞いてくれ〜（泣）。いや、聞いてください（泣）。うおお〜ん（泣）。

つて泣いて懇願してきた。

あまりに哀れなドライグを見て俺は

「…………一 天龍……ちよー笑えるんですけど（笑）。もひちよつと放置しよ」

勿論、無視しました。

その結果……泣き疲れたのか叫び疲れたのか何も言わなくなくなりました。

流石に可哀想になつた俺は就寝前に精神統一の要領でドライグの所に行つてみようとしたら……行けたよ。

やつてみてビックリだつたね、あれば。

まあ神様からチートっぽい肉体とか貰つてゐるから出来たのかね。とりもまあドライグの近くに降り立つと……グーグー寝てた。再びイラッときました。

人間イラッときたらやることは勿論

「寝てるんじやねえよ……」の泣き虫トカゲエ！

ド、ゴッ

ぶつ叩くよね、普通。

いや……流石にちょい叩いた手が痛かつたけどや。

ただドライグの方も結構効いたみたいで慌てて起きた。

ドライグを起こした俺はその後、色々と話した……のはいいんだけど殆どはドライグの質問だつたけどな。

「どうやって此処まできた?」とか「さつきの衝撃はおまえか?」とか「精神世界とはいえ俺を殴つてちょっと痛いとか…人間かおまえ?」などなどだ。

まあそこらは割愛しよう。

とにかくドライグと意志疎通ができるから神器セイイクコシキ・ギアが発動できるかな~  
と思い、試してみた。

……んだけど、何故か発動しなかつたんだよな~。

ドライグも驚きながら「こんな事は初めてだ。俺もわからん。」と言つてきた。

俺はまあどうでもいいかと思い、原作時期になつたら発動できんだろと割り切つた。

というか、発動できなくても生き残る術はあるしな。  
そんなこんなでドライグとは魔法とかでよくある念話みたいな感じでよく会話をしている。

ただ……俺があまりに口口い事に若干呆れていたが。  
仕方ないじゃん。

あんな変態を魂時に見たら女体が恋しくなるのは当然じゃん!?  
だから俺は悪くない。

悪いとしたらあの変態仮面が悪い。

で、ドライグと意志疎通しながら身体をひょひょひょく鍛えたりしてたんだよ。

今の俺、結構凄いと思つ。

12歳の段階で……軽く石を握ると砕けます。

地面殴ると……陥没します……アスファルトが。

罐が入るとかじやなく陥没ね。

反復横飛びをちょい真面目にすると……残像拳もどきが出来た……

これにはちょっと感動した。

とにかく…うん、あの変態仮面やり過ぎだ。  
まあ……いつか。

幸いな事に筋肉ムキムキじゃないから。  
とにかく今の俺はこんな感じ。

で、話を戻して

ドライグと会話しながら俺は今学校帰り。

担任の美奈子先生（美人しかもナイスボディ、ここ重要）のプリプリのお尻とバインバインのオッパイを脳内再生しながら歩いていたら

「ニヤ～オ」

「お、猫だ。しかも真っ黒。…………可愛いなあ～。」

猫発見。

あまりの可愛さに俺は夢中です。  
何やらドライグが言ってきてるが猫の愛らしさの前にした俺には釈迦に説法。

猫に向かつてしゃがみ込み

「チツチツ、あいで～。」

猫呼ぶ。

すると人慣れしてるとか

「ニヤ～」

ネコキタアー！

ちなみに俺は猫大好きです。

俺の手に擦りよる黒い猫。

か～い～な～

擦りよる猫の顎を搔いたり頭撫でたりしてた時に気がいた。

「あれ? こいつ怪我してら。…………結構痛そだぞ、これ。」

後ろの右足辺りに傷があった。

猫好きな俺は

「よつしゃ。おまえ、ちょっと俺んち来い。手当してやるから。」

と猫に話し掛けて抱き上げた。

暴れるかな～と思ったけど、意外にすんなり抱かれた。  
ほんとに人慣れしてんな、こいつ。

「ま、いいか。レッソゴー。ま、ふかふかだ、こいつ。猫サイコ  
オー。」

猫の抱き心地の良さに俺の気分は有頂天。

俺はそのままルンルン気分で帰宅した。

……………」の後……………ここに事やつてもうたと後悔する事も知りゆー。

まあ、ぬけを愛でようではないか（後書き）

もし原作を知らない方がいるのなら

二天龍……ドラゴン族でもトップクラスの力の龍。

赤い龍……ドライグ。

白い龍……アルビオン。

この2匹の龍の力は神や魔王（この世界の）をも凌ぐといわれている。

はるか昔にこの2匹が大喧嘩して色々あつて神器に魂を封じ込められた。

……だつたかな。

神器……セイクリッド・ギア神が造り出したもの。人間の身にしか宿らない規格外の力。

中には神滅具ロングヌスという強大な力を持つ神器もある。

主人公が持っている赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアもそれに当たる。

詳細はまた物語中に出できます。

恐らく。

今の所はこんなとこか。

というか、こんな説明いるのかどうかよくわかんない。

まあまた次回に。

## 主人公は頑張ります（前書き）

こんな感じで主人公は頑張ります。  
どうぞ。

## 主人公は頑張ります

「…………」

「…………」

『相棒、どうした?』

ドライグが何か言ってきたが俺には返事をする余裕がない。  
何故なら……今、俺の目の前には理解したくない光景が広がっているから。

「どうした? ボーイ? そんな所に突っ立つてないで早く座りたまえ。  
おおつと、もしかして我輩の膝の上に座りたいのかい? なかなか積極的なボーイじゃないかあ……濡れるぜ。」

「……黙れ、てめえ。

そう思つたが口には出さない。

言つた瞬間に何やら理不尽な田……いや恐ろしい田に会うしあづから。

ちなみに俺の目の前にいるクリーチャーの姿……な感じのリーゼントっぽい感じの髪型をしてている。

しかも黒い猫耳が生えている。

紫のレオタードっぽい服をピッカリ着込んでいた。  
あそこがモツ「コ」と隆起しています。

「…… オエッ

某グラップラーの主人公並みにムキムキさらにてカテカしてます。

大胸筋動かすな、キモイ。

黒い薔薇を加えます。

薔薇、頑張れ。

うすらとピンクの口紅を付けてます。

化粧品メーカーに謝れ、てめえ。

ごめん、これ以上説明したくない。

不甲斐ない主人公で下さいません。

とにかく一言で説明するなら

へ・ん・た・い！！

なんだ。

俺が転生直前にあつた変態仮面並みの変態だ。

そんな変態が少し部屋を空けたら出現してベッドに寝そべりながら扉を開けた俺を見ていたんだ。

何を言つてるか理解できないつて？

安心してくれ俺も全く理解していない。

理解しても理解したくないから理解できない。

「ボーア?どうした?そんな立ち往生してないでとにかく座りなよ。  
……それとも何だい?俺に『ピー』でもさせたいのかい?ははは、  
なかなかせつかちなボーアじゃないか。……だが嫌いじゃないぜ  
え。」

ツツー?

ヤバい!

早く何か喋らないと……ヤられる…

「あんた!……もしかして……いや認めたくないんだけど……  
……一縷の希望を持つて聞くけど……わたくしの猫……か?」

頼む！？ちがつて「なかなか鋭いじゃないかボーカイその通り。我輩はさつきの黒猫が人化した姿。まあ所謂猫又の一種だあ。ちなみに名は『九呂蚊』だ。よろしくな、ボーイ」…………オワタ。

俺の淡い希望は綺麗サッパリ消え去つちまつた。

俺は…………こんな変態の体に顔を擦り寄せたりしたんだ（泣）。

死のう…………ちょっと待て。

今、聞き捨てならない単語が聞こえたぞ。

「あの……もう一度……名前を聞いてもいい……ですか？」

いやいや、本当に勘弁してくれよ…………頼むから！？

「いいぜ。ボーイみたいな魅力的な少年に頼まれたら嫌とはいえないしな。我輩の名前は『九呂蚊』（くろか）だ。」

「…………黒歌くろか…………だと。」

「応よ。」

嘘だ――――？？？

אַלְפָנִים וְאֶלְפָנִים כְּבָשָׂר וְכְבָשָׂר

原作ギャラのエロい猫又お姉さん『黒歌』さんじやなかつた

アリスの心が、またまた震ふ。

だつたぜ…………できないだらうけど。

とばかり着いた俺は愛意猶々に優しく教えた。何を隠すか

「よし……とりあえずあんた…帰れ。それと2度とくんな。俺の前に現れていいいのは美女・美少女。」やだ。変態は間に合つてるから。ついでに死んでくれ。」

相棒……いつになく酷いな。

いやいやドライグさん。

これでモ優しく言つてゐ方で、少から

何で頬を赤らめクネクネしてんだ、この変態猫又。

「ふうう……少年からの熱い懸念の言葉を受けた我輩……思わず勃つちまたたぜえ（ウットリ。ビンビンしてきた……見なよボオ

1

変態猫又があそこを突き出してきやがった。

俺は思はず

オエエエエーツ

吐いた。

考えてもみる。

筋肉ムキムキの気色悪いオッサンがビンビンなアレをピッチリした  
レオタード越しとはいえ見せつけてくるんだ。  
俺の反応が普通だらう。

吐いた俺は悪くない。

ゲロ臭い部屋を掃除して換気してまた落ち着いた俺。  
変態猫又も手伝ってくれたのにはちょっと驚いた。

で、変態猫又に何で人間形態で俺の前に出てきたのかを尋ねたら

「ボーアに仙術を教えてやろうかと思つてな。」

つてな事を言つてきた。

仙術……ねえ。

確かこの世界の仙術つて“生命に流れる大元の力であるオーラ・チ  
ヤクラというやつを重視して源流にしている点”…………だつたか。  
魔法みたいな派手さはないけど生命の流れを操作する術で魔法を使  
う奴からすれば対処法が限られてくるから仙術食らつた奴は大抵  
死ぬ…………だつたな。

ふむ……学ぶのはいいんだけど確か俺の体つて……

『なあドライグ。俺つて……仙術使えんの？』

『わからん。相棒は……言つちや悪いが魔力が全く感じられん。生  
命力も並ぐらいしか無い……と思うんだが……』

『どした？いきなり黙り込んで』

『……おまえの数々の行動を思い返せば普通の人間じゃないのは嫌でも理解しているから仙術も覚えられるんじゃないか……とな。』

……何だコイツ。

まるで俺が人外みたいな発言をさらうと言いやがつて…………泣

かすぞ、この赤トカゲ#

俺の静かな怒りを敏感に感じ取ったのかドライグが必死に弁解してきた。

『待て待て待て！？考へてもみろ！精神世界とはいえ一天龍である俺を魔力強化とかせずに素手で殴つて「手…ちょっと痛い」で済む奴が普通な訳がないだろうが！？俺の方なんて結構痛いんだぞ。さらによく言つたらいつも不思議に思つてたんだがどうやって俺の元に来てるんだ！？まだ《セイクリッド・ギア》も発動してないのに！？』  
『……気合いじゃね？』理不尽だ！？相棒のチエンジを要求する！  
！『無理』うおお～ん（泣）、何でこんな理不尽の塊みたいな奴が今生の相棒なんだあ～～（泣）』

あらら…また泣き寝入りした。

原作と違つてこのドライグは泣き虫だな。

嘆かわしい。

まあいいか、後で殴るついでに慰めに行くか。  
それより今は…………

「オッサン……俺つてば仙術使えんのか？」

「我輩の見る目は確かだ。ボーイには何か不思議な感じがしてなあ

……ボーリなら極められたと想つただけで。」

「……こいつ……俺の“力”に何となくだが氣づいたのか。  
ドライグですら氣づかないのに……。」

まあいいや、覚えるなら覚えとくとするか。

「じゃあ教えて。俺、頑張る。ついでに格闘術とかもお願ひ。俺の  
名前は兵藤一誠。イッセーって皆は呼ぶ。」

「そうかい。わかつたぜえ、イッセー。これからしばらく熱い修  
行を共に励もうぜ……（ジユルリ）」

「早またか俺（汗）。

とにかくいつちょ頑張って原作までにそれなりに強くなつて死亡フ  
ラグを叩き折るとしよう。

「初めても頑張つて守るぞ！？」

おまけ

「さてドライグ…………楽しい楽しいハツ当たりタイム…………もとい  
サンドバッグタイムの始まりだ。」

「言い直した意味がない！？クツ、舐めるなよ相棒！俺とて二天龍  
と謳われ神や魔王すら凌ぐと言っていたんだ。いつも殴られっ放  
しだと思うな！？」

「まつまう……ならどうするんだ?」

「……するんだあ（ガアアアツ」

「赤龍帝のブレス……か。流石に強力だな……だが……」

「ガアアアアツ

「どうだ!? 殺ったか?…………なつ!?

「…………なかなか痛いじゃないか、ドライグさん。思わず《換装》しちゃつたじやん。…………つか出来た事に俺もビックリだけど。」

「…………何だそれ?…………赤い鎧……か?」

「これが?これはアレだ。おまえをお仕置きするために生まれてきた装備……名は《ソウルゲイン》だ。本来は青い鎧なんだけど。」

「何だそれは!?俺をお仕置きするためつて……ちょっとおかしいだろ、それ!?!」

「気にすんな 些細な事だ。さて……お仕置きをされる覚悟は万端か?」「こいつのラッシュはおとイターデ……（ニヤリ）」

「ま、まて……ちょっと待」逝くぜえー?《白虎咬》……「ギャアア

-----

つ  
い  
く

## 主人公は頑張ります（後書き）

原作豆知識

黒歌について

原作では主人公・兵藤一誠のライバルである『白龍皇』側のエロい猫又お姉さん。

詳細はまた登場した時にでも。

ふう……主人公がまた強くなるなあ。

原作どうしようかあ。

全く考えてない。

とりあえず……イッセーくんの貞操は無事ですかね。

後、ドライグ……頑張れ。

## アーシア・アルジエント（前書き）

今回……珍しくシリアル？な雰囲気が。  
上手く書けたなんて保証はございません。

それで良ければどうぞ。

## アーシア・アルジエント

はあ～い 皆さん。

こんにちは～。

俺は兵藤一誠。

この物語の主人公。

あれからもう何年も経ちましたよ。

今はもう高校一年生。

やりたい盛りの煩悩溢れる青少年を

え？何？修行はどうしたつて？

H A H A H A、そんなもんを聞いて何が楽しいのかわからないけど、

簡単に教えてようか。

はい回想シーンビュ～

「ボーイ。仙術ってのを大まかに説明するとだな「あ、大体知つて  
る。やり方をとりあえず教えて。後、股間を強調すんな。近寄るな。  
」……そうかい。なかなか博識じやないかあ。なら早速実践といこ  
うか。」

「よひし……何故近づく？何故背後に回つた？」

「なあに。ちよいと荒療治だがボーイに気を流し込み感じてもらう  
だけだ。襲わないさ。我輩はこう見えて紳士だからな。無理矢理は  
嫌いなのさあ。……ジユルリ」

「ぐつ……教えてもらひつ身とはこえ何か嫌だ……襲つてきたら躊躇  
いなくぶつ飛ばすからな。」

「つよーかい。やねや。フンッ…」

「……シシッ…」の感じ……これが氣…か。」

「やねじやないかボーカ。一回ドロシを掴むとな。なかなか教え  
がいがある。」

「……ふむ。じやあ次よひじべ。」

「わかつたぜえ。ボーカはタフだな。」

数ヶ月後……

「おつりつー..」

「まだ甘ーー気の練りが遅ーー?そんなんじやあ我輩を満足せしむ  
には程遠いわあ!」

「お前を満足せすなんて誰がやるかあーー!」

更に月日が経ち……

ドガッ

「グツ……見事だ、イッセー。今の一撃……我輩を超えたな……」

「まあまあ……やつた……よつやく……」の変態に満足する一撃  
『食らわせた。…………しどかつたあー。』

「ふつ……もう我輩が教える事はない。これからは技を磨き上げ強  
くなれ……イッセー。」

「心地。……色々あんがとよ……九四鹿。」

「よつやくお前を呼んでくれたな……まだボーイ……いやイッセー  
とはこしたいが我輩も色々とやることがあるのでな口惜しいがこれで  
終わりだ。』

「…………行くのか?」

「ああ……また縁があれば会えるだろ?。今の時こな……イ  
ツセーの初物を何が何でも奪つてやるさあ。さらばだ!-? (シユタ  
ツ)

「はつ……俺の初めての相手はもつ決まつてんだよ。てめえなんか  
いやせられねえ。…………じゃあな。」

回想終わり

つてな感じである程度の仙術と格闘術を学んだのぞ。  
ちなみに強くなつた俺を見てドライグが

『相棒が……強く……やめてくれ……俺に対する理不尽なハツ当たりが更に酷くなる……勘弁してくれえ（泣）。つおおーん（泣）』

だとわ。

H A H A H A、安心しろドライグ。

おまえに対するハツ当たりはちゃんと手加減するから。

何事も生かさず殺さずが基本なんだぜ

あれ？俺ってこんなにうだつたかな？

まあいいや、ドライグだし。

話を戻そう。

とにかく修行が終わり、日々を生きてきた俺。  
最初に言つた通り高校一年になつてしまふしたんだけど……来  
ないんだよね。

開始の幕を上げる彼女……天野夕麻改め墮天使レイナーレが。

原作では彼女が告白してきて俺がそれにOKしてちょっととの間恋人  
となつた後に初デートして夕暮れ時の公園でロマンチックな雰囲気  
の中……殺される。んでからメインヒロインのリアスさんに助けら  
れ悪魔として生まれ変わる……んだけど来ないんだよ。

あつれ～？おかしいな～。

ちゃんと駒王学園に入学して美女・美少女チェックしてメインヒロ  
イン達がいるのを確認したから間違いないのに……何で？

しかもね～、困った事にね……今、俺の目の前に金髪美少女シスター  
ーが右往左往してるんだよ。

ちなみに現在学校帰り。

彼女は原作のメインヒロインであるアーシア・アルジェントちゃん  
なんだよね。

まさか悪魔になる前に会つとはね……。

あ、転んだ。

……パンツをロックオン……白……か。

グッジョブです！？

つと、それより助けないと

「大丈夫ですか？」

「《あうう、すいません。ありがとうございます。》」

手を差し出しながら声を掛けた俺。

彼女が英語でお礼を言いながら俺の手を取る。

うん？何？悪魔に転生してないのに何で英語が理解できるかつて？  
んなもん前世の知識を活用してんだよ！？

自慢じやないが前世じゃ俺はバリバリ英語喋れたさ！

中国語・ドイツ語・フランス語も完璧さ！

何故なら……個人的にその国の女性が好きだったからだ！！

ドイツはラウラちゃん、フランスはシャルルちゃん、中国は超鈴音  
ちゃん……一人作品が違うなんてのは気にすんな。  
細かい事だ。

まあとにかく俺はその国の言葉なら喋れると理解してくれたらいい  
よ。

作者は無理ですので会話の中に《》を入れさせてもらっています。転  
生させてからは通常に戻します。

俺はシスターの手を引いて立ち上がらせた。

すると彼女のヴォールみたいなのが風で飛ばされた。

「…………」

俺は見入った。

束ねていたと思われる金色の長髪がこぼれ、ストレートのブロンド  
が夕日に照らされキラキラと光る。

そしてグリーン色の綺麗な瞳。

引き込まれそうになつた。

完つ璧！美少女。

しかもぴょこんと跳ねたアホ毛も完備。

パーfectウ！？

まさにパーfectウ！？

内心で素晴らしい感動して呆然としてたら

「《あの～～ビワしたんですか？》」

訝しげな表情で俺の顔を覗き込んできたシスターちゃん。

……駄目だよ、キミ。

そんな簡単に見知らぬ男の顔へ近づいたやあ…………お持ち帰りしちゃうよ？

つと、そんな事より返事しないと

「《『メン、『メン。えつとキミは……旅行……じゃないか。》」

俺は彼女の横にあつた鞄を見てそう尋ねてみた。

いや、違うのは知ってるんだけどね。

「《いえ、違うんです。実はこの町の教会に今日から赴任することになりましたアーシア・アルジエントと申します。あなたもこの町の方ですか？》」

「《うん、当たり。俺の名前は兵藤一誠。イッセーと呼んでくれ。

『

「《そうですか～よろしくお願ひしますね。》」

グハッ！？

アーシアちゃんのニコボが発動。

俺のハートに6215のダメージを食らわせた。

くつー！？

何だこの可愛い生き物は！？

原作イツセーが超可愛いと言つていたのも領けるつてなもんだー！

原作ではこの子がレイナーレに殺されるんだよなあ

助けても問題ない……かな？

そんな事を考えつつ俺はアーシアちゃんと会話をする。

彼女は道に迷つてしまい誰かに尋ねようにも言葉が通じなくて困つ

ていたらしい。

俺は彼女を教会に案内……する事にした。

いや、してしまった。

俺は最低だ。

彼女が教会に行けばどうこう処遇を受けるのか知つてているのに……。

変に原作を弄るといつなるか解らなくなる事を俺は怖れたんだ。  
本当に……最低だ。

道案内をしようとした歩き出した時

「うわああ～ん！」

子供が転んで怪我をしていた。

アーシアちゃんがそれを見つけ慌てて近寄り

「『大丈夫？男の子なら』のくらいいのケガで泣いてはダメですよ。

』」

と言ひながら擦りむいていた膝に手をかざし……

怪我を直した。

セイクリッド・ギアである《聖母の微笑》トワイライト・ヒーリングだ。

どんな傷でも直してしまう神器。

例え悪魔だろうが墮天トロヤン使だろうが人間だろうが。

俺が呆然としている間に母親が子供をそそくさと連れ去つていった

……アーシアちゃんに嫌な目を向けながら。

アーシアちゃんはその視線を受けながらも笑顔で手を振つてお別れをしていた。

子供の方も無邪氣にお礼を言つて去つた。

その笑顔はどこか寂しげだったのを俺は見逃さなかつた。

俺は彼女に子供がお礼を言つていた事を教えた。

彼女はそれを聞き少し嬉しそうにした後

「《今の力……見ましたよね。あれは治癒の力……神様からいただいた素敵なものなんですよ。》」

俺にそう言つてきた。

笑顔のままで。

俺は深く追及しないで

「《そ、うか。アーシアちゃんにはピッタリの力だな。アーシアちゃんは……優しいから……本当にお似合いの力……だな》」

「《優しいなんて！？そんな事はありませんよ！？》

彼女は顔を赤らめながら謙遜した。

俺はそんな彼女を見て苦笑しながらそれを否定。

アーシアちゃんが優しくないなら世界中の奴らが優しくないと俺は

本気で思つたから。

俺とアーシアちゃんはお互に否定しあう。

何か可笑しなくなってきた俺達2人は普段と吹き出した後、大笑いをした。

ひとしきり落ち着いた後、アーシアちゃんを教会前まで案内。

現時点では悪魔じやない俺は拒否反応は出なかつたが……この教会から禍々しい気配だけは感じ取れた。

俺がそれを感じ取つてゐる間にアーシアちゃんがここですと言つながら俺から離れた。

少し離れた後、彼女はぐるりと振り向き

「《いや！？いいよ、そんなの。ただ道案内をしただけだし。俺は礼がしたいんですけど》」

と言つてきた。

俺は思わず

「《いや！？いいよ、そんなの。ただ道案内をしただけだし。俺はこれで帰るから。》」

そう返事をしてしまつた。

アーシアちゃんは残念そうな表情をしつつ引き止めるのは悪いと思つたのだろう

「《そうですか。それでは次に会えたら必ずお礼をしますね。なので……またお会いしましょうー》」

笑顔でそつと告げてきた。

眩しいな……。

彼女は本当に……優しくて良い子だ。

俺とは……全然違う。

俺は居たまんなつてアーシアちゃんに別れを告げてその場を去つた。

アーシアちゃんは俺が見えなくなるまで手を振つていた……。

自宅に戻つた俺はベッドで寝転びながらぼけつとしていた。そんな俺が珍しいのかドライグが話しかけてきた。

『どうした相棒? ぼけつとして。お前らしくないな。いつもなら卑猥な本を呼んで興奮しているだろ?』。アーリア。

…………#

俺だって悩む時は悩むんだぞ、バーローが。

『別に。偶にはこんな事もあるわ。今日がそんな気分なだけ。』

『………… そうか。』

ドライグはそれっきり黙つたまま。

…………まあいいや。

ドライグを相手にする気分じゃないし。  
思い出すのはアーシアちゃんの笑つた顔。  
次に寂しそうな横顔。

「…………ほんと……最低だな俺。」

ポツリと呟いた俺の言葉は妙に部屋に響いた。  
俺はそのまま…眠りについた。

つづく

## アーシア・アルジエント（後書き）

一回限りります。

次回はアーシア編の最終回。  
強引な展開になります。  
先に謝罪しておきます。

すいません。

では

白騎士降臨……あれ？（前書き）

文章が長すぎました。

最終回と言いながらも分けてしまつた不甲斐ない作者です。

すこません（泣）

白騎士降臨！……あれ？

アーシアちゃんと別れた日の翌日

俺は朝からぼけーっとしながら授業を受けていた。

登校してきた俺にエロ同志たる元浜や松田がエロDVDがどうのとか言つてきただが、俺はそれを聞き流しながら2人に拳銃を食らわし黙らせてからDVDを回収してまたぼけーとし始める。

考える事は昨日のアーシアちゃんの事。

未だにそれについて悩む俺。

……はあ、どうしたものか。

…………  
1日の授業がいつの間にか終わり帰り支度をしていたら

「ひといちは 兵藤一誠くん。」

と声が聞こえた。

俺は顔を上げる。

そこには……

「初めてまして。私、天野夕麻です。ちょっと話したい事があるから付き合つてくれないかしら？」

天野夕麻……いや堕天使レイナーレがにこやかに笑いながら立っていた。

「…………。」

レイナーレがそう呟いた。

俺はあの後レイナーレの言葉に心を承し彼女の先導の元、公園に連れていかれた。

途中ドライグがレイナーレの事を墮天使だと忠告してきた。  
俺は了解と言いつづらに見ていくように告げておいた。

「で、俺に何か用？」

「あはは、せっかちだね。イッセーくんは、そんなんじゃ女の子にモテないだ。」

余計なお世話です。

俺は今の俺を好きになってくれる子とイチャイチャするんですー！  
内心でそう毒づいていたらレイナーレが少し頬を赤らめにかみながら

「まあ……そんなあなたを好きになっちゃった私なんだけどね……  
……イッセーくん。あなたが好きです。付き合つて下れー。」

告白してきた。

俺はそれに対しても

「悪いが断る。俺はあんたとは付き合わない。」

バツサリ断つた。

彼女は予想外だったのかポカンとしていた。

「えっと……あの……理由を……教えてもらつてもいいかな？」

演技だけは本当に上手いな。

腹の底では俺を嘲笑う気満々だつたひつこ。

こんな奴に……アーシアちゃんが…………俺は

「俺はな……今俺を好きになつてくれる女の子と付き合いたいんだ。」

「イッセーくん？」

「もし……そんな女の子が現れなかつたらそれはもう仕方がないって諦める。」

俺は……

……決めた。

「……せめて俺の知つてゐる女の子達には……幸せになつてもらいたいって……決めた。今、決めた。」

「何を……言つてるの？」

原作なんでもう知らない。  
知つた事じやない。

優しいアーシアちゃんが泣きながら死んでいく光景を見てしまつぐ

らいならー…?

「俺が……ハッピーハンドにしてやんよーーー。」

先の分からぬ恐怖なんて、「ミミ箱に捨てて廃棄物処理場にG.Oだーーー！」

「あなた……頭おかしいの？ 意味の分からぬ事を「うつさい。墮天使風情が。」…………今なんて？」

ははは、表情と気配が一瞬で変わりやがった。  
本性が出てきたねえ。

『……あの墮天使も可哀想に。』

『何だ？ いきなりどうしたドライイグ？』

『いや何……あの墮天使が不憫で思わずな。』

『意味が分からん。』

『経験者は語る……だ。相棒があいつを敵と認めたんだらうーーならあの墮天使の行く末は決まっているではないか。』

『一応聞いておく。おまえ……どんな想像をした。』

『雌奴隸。違うのか？』

……「Jの泣き虫トカゲH。  
後でぜつてーにシバぐ。」

それと間違ひだ。

『ドライグ一つ教えてやる。』

『?』

『俺は……腐った奴は大嫌いだ。側に置いておくのも虫酸が走る。だからこの場合……完全滅殺が正しいんだよ。』

『…………そうか。程々にな。おまえが暴れると周辺被害が計り知れんぞ。殺るなら静かに殺れよ。後……トバツチリは勘弁しろ。』

…………そいつは知らん。

つと、ドライグと会話してたらあっちをほつたらかしにしちまった。

「わりいな。墮天使さん。ちょうどばかし気を取られちまた。まああんたみたいなゴミ虫以下にも劣る腐った奴にはお似合いの扱いだつたか？」

「貴様つ！？たかだか人間風情が至高の存在となる私に向かつて！？」

ははっ、キレた（笑）

あの怒つた顔……チョー笑えるんですけど。

「何が至高だ。他人から奪うセイクリッド・ギアでいい気になんなよ。後、あのセイクリッド・ギアはてめえが触れていいもんじゃねえ。あの子だけのもんだ。あれはアーシアちゃんの為に存在するもんだ。」

「何故……それを……」

喋るかバーロー。

呆然としてやがる。

今之内に一撃…………ツツ！？

「ヒヒヒッ、不味そうな臭いがするなあ。美味そうな臭いもするなあ。」

「こいつは…………はぐれ悪魔か！？

何でここに？

こいつは確かどつかの廃屋に…………

「…………」  
「こいは退散しておこいつかしらね。（バツ」

「待て！？……チイツ、予想外の出来事で逃がしたか。」

レイナーレが黒い翼を生やして飛んでいった。  
クソ、マズッた！

俺があいつの計画を知つていてしたら無理矢理にでも計画を始めるぞ！？

早くしないと…………な。

とにかく今は…………

「ああ、残念だ。美味そうな臭いの奴は行つちまつた。残つたのは不味そうな奴じやないか。…………まあいいか。今日はこいつで我慢しようかねえ、ヒヒヒッ。」

こいつを片付けるとしますかね。

『珍しいな。相棒が敵を取り逃がすなんて……鬼の攬乱……と言つんだよな、この場合。』

じゃかましいわ！？

レイナーレ side

「兵藤一誠……あの人間が何故あの計画を……」

レイナーレが空を飛びながら呟いた。  
そんな彼女の側に

「どうしたのだ？ レイナーレ。そんな顔をして。」

「ドーナシーク……ちょっとしへじつたわ。それより例の計画を早めるわよ。」

レイナーレの言葉にドーナシークが怪訝な顔をする。

「…………計画が洩れている可能性があるわ。」

「なつ、バカな。そんな事は有り得なんだつ。」

「いえ……事実よ。さつき私が接触したセイクリッド・ギア持ちの人間が知つていたわ。もしかしたらこここの管轄をしている悪魔と関わ

りがあつたのかも……だから邪魔者が入る前に始めるわよ。」

「…………その人間とやらは大丈夫なのか？」

「問題ないわ。見た所大したセイクリッド・ギアではないわね。《トウライス・クリティカル龍の手》。ありふれたモノよ。」

レイナーの言葉にドーサークは納得。

彼も人間が《龍の手》を持つた程度では障害にならないと思つたら。

故に彼女らが警戒するのは……

「なら後は……《紅髪の滅殺姫リアス・グレモリーとその眷属の悪魔か。」

「そうね。まあ悪魔風情にやられる私達ではないから大丈夫でしょうけど……万が一の為に警戒はしておきましょう。」

「了解した。カラワーナとミシテルトにもそつ伝えておこう。計画を実行するのは何時だ？」

「今日……と言いたいけど準備もいるから明日の夜にしましょう。」

「わかった。」

ドーサークはそう言いレイナーから離れていった。

レイナーもドーサークが去ったのを見て移動を開始……そのまま自身の拠点へと飛び去つていった。

彼等は間違つた。

一番警戒をしなくてはいけない相手を。

彼等の運命はこの時点で決定したのだ。

レイナーレ side end

「はあ……リアス先輩は何をしてんだか……」そんな雑魚をのさばりしておくなんてな～。ドライグもそう思わない？

『リアスとやらは知らんが』『いつが雑魚といつのこは賛成だ。しかしまあ……』

「どうした？」

『……一撃で木つ端微塵にした相棒には相変わらず驚かされるな。さつきは何だ？以前見た鎧とは違っていたが……』

「あれか。あれは『アルト・アイゼン』って名前。特徴はさつき使った奴……と頑丈さだ。ちなみに補足すると先の一撃には気も込めた。中までぶち込んで生命の源……魂だな。それを爆散させた。その後でぶち込んだ武器を炸裂させて……身体をボカーンだ。理解できたかねワトソン君？」

『成る程。……俺には使つないよ。後ワトソン違う。』

ドライグは心配性だな（笑）。

相棒のお前にそんな危ない技を使うかよ、全く。  
とにかく移動するか。

場所は……教会だ！？

『相棒……。』

『何だ？』

『移動するのはいいが……さつきの公園……滅茶苦茶にしたのは  
いいのか？』

『……俺があれを直せると思つか？』

『思わない。』

『だろ。だから気にしちゃいけない。大事の前の小事だ。』

『……そうか。』

リアス side

イッセーが立ち去った後、公園……だった場所では複数の人影が現

れていた。それは駒王学園の制服を着た男女達。

紅い髪を靡かせた巨乳な美女、リアス・グレモリー。

黒い艶やかな髪をポニー・テールにした大和撫子を表現したような巨乳美女、姫島朱乃。

白髪で無表情そうな口り顔美女少女、塔城小猫（オッパイには触れるな。彼女には未来がまだある！？）

後はイケメンリア充、木場祐斗。

彼女達ははぐれ悪魔が現れたと聞いて急いでやつてきたのだが……

「祐斗。はぐれ悪魔の他には何か情報はあった？」

「いえ何も。情報でははぐれ悪魔がここに向かつたとしか聞いていません。」

「……そう。朱乃、魔力は感じ取れたかしら？」

「…………はぐれ悪魔がいた痕跡と他には…………微かですが墮天使の気配もします。」

「…………墮天使……ね。ならその墮天使がやつたと推測した方がいいのかしら？でも…………」

リアスは周囲を見渡す。

それは…………ある一点を中心に何かが爆発したような後…………否、惨状だったから。

ベンチは吹っ飛び、林はなぎ倒され、街灯はへしゃげていた。爆発の中心と思われる場所は地面が深く凹んでいた。まあ小型の爆弾が落ちたのをイメージしてくれればいい。

近隣住民の迷惑にならないようにとイッセーはちゃんと公園に仙術

特有の結界を張つたので公園外には被害が出なかつた。  
ただそれがいけなかつた。

何故なら……

「部長。墮天使じゃないと思います。」

「小猫……何故？」

「……仙術の気配がありました。」

「……それ本当に?まさか……」

「いえ。違います。あの人ではありません。あの人気配を間違える筈がありませんから……。」

「……そう……ね。じゃあ一体誰が……」

小猫との会話を終えリアスは考え込む。

仙術を使う墮天使……は有り得ないと考える。

墮天使は基本的に魔法を中心として使う。しかも自分達の天敵である光を駆使して。

よしんば使うとしても今回の場合はぐれ悪魔との戦闘があつたならほぼ必ず光関係の魔法を使う筈だから。だがその痕跡は無いと朱乃が言つてきた。

朱乃がそう言つたのならそれは確実。

リアスは考え込む。

仙術を使う相手が自分の管轄にいる……しかもぐれ悪魔を一蹴する力量。

害があるかどうか調べなければいけない。

そう思った。

そんな時、周辺を調査していた朱乃が何かを見つけた。

「あら? これは……生徒手帳……この子は確かに……部長、これを。

「

朱乃がリアスに拾った物を渡す。

リアスはそれを受け取り……

「兵藤一誠……誰か知ってるかしら?」

そう呟いた後、尋ねた。

「知つてます。結構有名ですよ、彼。」

「私も知つてますわ。人づてですけど。」

「私は知りません。」

祐斗と朱乃が知つていると言い、小猫は知らないと言つ。

リアスは知つている2人にどんな人物が聞いてみたら、2人は顔を見合させてから

「えーと……卑猥な事が大好き……って言えばいいんですかね……」

「Hな事が大好きな子……ですね ふふふつ

と言つた。

リアスは生徒手帳に写つた締まりの無いヘラヘラと笑つたイッセーを見ながら

「ふうん……とにかくこの子を調べよつかしら。それでいいわね、皆。」

「「「はい。」「」」

リアスの言葉に3人が返事をする。

リアスは携帯で公園の修繕を依頼した後、立ち去った。  
去り際に

「兵藤一誠……ね……面白そうな子。害は無さそうな感じね。」

手帳を再度見ながらそつ connaîtいたのだ。

リアス side end

「ぶえつくしつ！？」

いきなり鼻がムズムズしてきたから思わずクシャミが出ちまつたよ。  
ふう……きっと俺の事を噂している見知らぬ美少女がいた『相棒。』  
何か有利得ない事を考えてないか？顔が変だぞ？』…………後でア  
ルトのバンカー打ち込み決定。

まあいい。

それより今は……

『『ドライグは何か感じるか？』』

『ん？いや何も……といつか今の俺では相棒の視界に写った相手の事しかわからん。俺のセイクリッド・ギアが発動してれば話は違つたがな。』

そういうやすっかり忘れてた。

こいつのセイクリッド・ギア《赤龍帝の籠手》ってまだ発動できないんだつけ。

たぶん俺が悪魔にならなきや駄目なんだろしげ……魔力関係で。今このことは文字通り役立たずなんだつた。

『役立たずが（ペッ）

『酷つ！？というか俺が悪いのか！？むしろセイクリッド・ギアを発動できない相棒が悪いだろしが！』

いやまあやうなんだけど……つに言葉に出しちゃつたんだよ、勘弁な。

まあドライグは置いといて……今俺は教会前の木に潜んでいる。勿論、気配は遮断済み。

仙術チヨー便利です。

で、気配を探つてみたんだけど……何か気配がしないんだよね～。あれ？

場所合つてるよね？

ここだよね？

教会つていつたらここしかないし……

「とりあえず待つてみるか。もしかしたら計画準備に手間取つてゐかも知れないしな。……仮眠でもしと。」

おやすみ～……。zz。

『お…………うーおい』

何だ？

うつさいな～。

静かに寝かせろよ#。

『おい！？』

『うつさいわ！赤トカゲ！？静かに寝かせろ、バカ！』

『赤……トカゲ……酷い……初めて言われた……俺 ドラゴンなのに……トカゲ扱いつて……うおお～ん！？』

また泣いたし、こいつ（呆）。

つたく、何なんだよ。

泣きたいのはこっちだ。

せつかくの安眠を邪魔……安眠？

…………あ、あ、ー？

ヤバッ！！

あんまり遅いから仮眠じゃなくなつてたア――！？

『何でドライグは起こさなかつたんだよ――！？』

『だから俺は起こしただろ？が…？それをお前……トカゲ扱いって（泣）……酷すぎるぞー、うおお～ん（泣）』

…………すんません。

今日は俺が悪かつたです。  
つとそれより今は……

『ドライグ。泣くのは後にしろ。謝罪も後でしてやるから。それより今の時刻は分かるか？』

『ぐずつ……わかった。今はあれから一度半日は経っている。』

『だから夜かよ。どんだけ寝てたんだ俺は……』

教会の中は…………ぬつ、ジンゴホー。

地下の方にわんさか気配があるし。  
上の階には…………1人。

これは外道神父のフリードかね。  
どうだつていいか。  
瞬殺してやる。

『行くぜ、ドライグ。俺の8割本氣をちゃんと見ておけよ。』

『…………何だ8割本氣つて。まあ面白いものが見れるとでも思つておく。（中にいる奴ら…………可哀想に（ホロコ））』

さてと……今回はこいつで行きますか。

お姫様を救うには騎士がお似合い！……つてね

「ヴァイス……こつあまーす！？」

## リアス side

「それは本当なの？」

「はい。町外れの教会で墮天使が集まって何やら儀式めいた事をやつているそうですね。」

「そう……下手に手を出すのはまずい……かしらね。」

朱乃の報告にリアスがそう答える。  
下手に手を出せば墮天使と悪魔との全面戦争になりかねないからである。

これが墮天使全体の計画だつたなら……の話だが。  
そんなリアスに朱乃がさらに告げる。

「部長。これは恐らく墮天使全体の計画では無いかと。一部の墮天使が暴走したものだと思いますわ。」

「何故？」

リアスの問いに朱乃が自分の得た情報を教える。

「先日頂いた情報に何人かの墮天使がコソコソと動いているという

のがありました。それとその墮天使達は小物ばかり……というのも。ここからは推測になりますが上方達が何も言つておりません。もしこれが墮天使全体の計画なら少しぐらいは情報を掴み指示を出してくるはずです。それが全く無い。加えて天使側も何もアクションを起こしてない。」

「墮天使側の隠匿が完璧といつのがあるけど?」

「嫌ですわ、部長。上方達がそこまで無能……とは思つてらつしやらないですよね?」

朱乃の言葉にリアスは苦笑する。  
リアスも予想はしていたのだ。

念のために聞いただけ。

まあそこまで慎重にならざるを得ないのが現在の状態なのだが。  
リアスは少し考えてから立ち上がり

「行くわよ。皆さん連絡を。」

そう告げた。

朱乃は了解と言い祐斗と小猫に連絡を取り始める。  
そんな朱乃を見たリアスはふと思つた事を聞いた。

「そういうえば兵藤一誠については報告がなかつたけど?」

その問いに朱乃が困ったような表情をして

「それが……彼は今日欠席してまして……周辺人物から聞いた情報ですと……前に聞いた事と同じでして……」

「家の方は？」

「家族関係は何世代か前を調べても普通でしたわ。後今日は家にいなかつたみたいですね。小猫ちゃんが調べに行つたみたいです。」

それを聞いたリアスは最悪の展開を考えていた。

それは……イッセーがはぐれ魔に食われたと言つことを。

逃げようとした拍子に手帳を落としたのか？と。

その後で謎の仙術使いがはぐれ魔を滅した……そう考えたが附に落ちない点もある。

リアスはとりあえずイッセーについては後回しにする事にした。

今は墮天使の方が優先事項と思考を切り替えた。

そんなリアスに朱乃が連絡を終えていつでも行けると言つてきたので

「それじゃあ行くわよ。」

と告げ歩き出した。

朱乃もそれに続く。

リアス・グレモリーと兵藤一誠の邂逅は……間近に迫る。

リアス side end

other side

堕天使・レイナーレは高笑いを堪えるのに必死だった。  
何故なら……

「もうすぐ……もうすぐよ。あれを手に入れたら私は至高の存在となる。」

「うう……」

レイナーレはううとりとしながらアーシアを見やる……十字架に縛り付けられたアーシアを。

アーシアの胸元には何かの陣が描かれていた。  
似たような陣がレイナーレの胸元に。

これはアーシアが持つセイクリッド・ギアを強引に抜き取り自身に宿す方法。

移植みたいなモノである。

これをやればアーシアが死んでしまうがレイナーレ達からすれば何も問題はない。

人間が1人死ぬだけ……いや、自分達の計画の足掛かりになるのだから感謝しろと言わんばかりの態度であった。  
レイナーレの後ろに控えた3人の堕天使は

「これで我も上に……」

「レイナーレよ。約束は守るのだぞ。」

「もし約定を違えたら……解つているな?」

そう言った。

レイナーレは微笑みながら

「ええ。約束は守るわ。私がアザゼル様やシェムハザ様の寵愛を受けた後、あなた達が上に座せるようにお願ひする……でしょ。わかっているわ。」

そう返事をした。

内心では切り捨てる気でいるが表情には一切出さない。  
実は3人も内心では幹部になつたらレイナーレをどう始末してやうか考えているのだが。

まあ似たり寄つたりの集まりである。

そんな時アーシアが意識を虚ろにしたまま呟く。

「イッセー……さん……」

イッセーの名前を。

彼女はまた会つと言つたのに会つ事ができなくなるといつ申し訳ない気持ちが心に渦巻いた。

異国之地で誰も助けてくれなかつた自分に優しく手を差し出してくれたイッセーにお礼ができないなど申し訳ない気持ちもまた渦巻いた。

彼女は自分が死のうとしている間際でさえ他人の事を考えていたのだ。

アーシアは虚ろな意識のまま

「『めん……なさい』……イッ……セーさん……お礼……できれい……無いです。」

この場にはいないイッセーに謝罪した。

これが彼女の最後の言葉となる…………苦だった。

アーシアの目の前にいる堕天使達とはぐれエクソシスト達が騒いでいる。

そんな時

ドガアアアアン！！

激しい爆発音と激しい揺れが全員を襲った。  
そして……

「ハツハアー！？お姫様は返してもらおうかー、ゴミ虫以下の糞野郎  
共！！」

そんな声と共にアーシアを縛っていた拘束が解かれ誰かに抱かれた。  
アーシアは声に聞き覚えがあった。

それは昨日自分を助けてくれた人の声。  
また会つてお礼をすると約束した人の声。

アーシアはぼんやりと目を開け、その人の名前を呟いた。

「イツ……セーさん……？」

それに

「応さ。アーシアちゃん。また……会えたな！」

意気揚々とした声が返ってきた。

アーシアは徐々に意識が戻り視界もクリアになつてきた所で……  
見た。

今のイツセーの姿を。

アーシアはそれを見てポカンとして

「赤い……鎧?……騎士?」

そう呟いた。

イッセーはそれを聞き取り

「お、よくわかつたな。これは確かに騎士だぜ。名は『ヴァイスリッター』。意味は白騎士……なんだけど何で赤くなつてんだ?……ドライグの影響か?……自己主張も大概にしろよな、あの泣き虫が。」

「

そう言い放つた。

その後イッセーは仮面姿のままお姫様だっこしているアーシアに顔を向けて

「ま、そんな事より……助けに来たぜ……お姫様」

と宣言した。

それを聞いたアーシアは色々な気持ちがグチャグチャに混ざり言葉に出来なかつた。

ただ……涙を流したのであつた。

side end

## 白騎士降臨！……あれ？（後書き）

原作豆知識（前回やつてなかつた）

### 墮天使

- ・言わずもがな天使が墮ちた種族。  
墮天使達が集まり出来た組織が『神の子を見張る者』<sup>グリゴリ</sup>である。トップはアザゼルという強力な墮天使。

### アーシア・アルジエント

- ・かつて聖女と称えられた金髪美少女ちゃん。  
どんな傷でも癒やしてしまった『聖母の微笑』<sup>トワイライト・ヒーリング</sup>で色々な人を癒やしてきた。
- が、ある時ひよんな事で傷ついた悪魔を癒やしてしまったのを教会関係者に見られた上に治した悪魔が祓いにきたエクソシストを殺してしまった事でその罪を問われ『魔女』の烙印を押され教会を追放された。

糺余曲折を経て墮天使レイナーレの元に来た。

### 『紅髪の滅殺姫』 ベニガミのルイ・ブランセス

- ・原作メインヒロインであるリアス・グレモリーの一いつ名。滅亡の力を宿した彼女ならではの一いつ名である。

### 天使・悪魔・墮天使の関係

・現在は三竦み状態でそれぞれ冷戦中。

はるか昔に大戦争を起こしそれぞれの陣営が大打撃を受けてひとまず戦争は終了した。

詳しい事は後の物語で明らかになる。

## はぐれ悪魔

・眷属である悪魔が何かの理由で主から逃げたもしくは主を失った悪魔の事。

今回出てきたはぐれ悪魔は主のもとを逃げ己の欲望を満たすためだけ暴れていた雑魚キャラ。ちなみに名前はバイザー。

## はぐれエクソシスト

・何らかの理由で教会から逃げたもしくは脱退した元エクソシスト。今回名前だけ出てきたフリードはそれなりに強くて結構有名な外道神父さん。

……次回出るかはまだわかりません！？

こんな所ですかね。

まあ分からないところがあるなら気軽に聞いて下さい。

……頑張つて調べます。

それでは次回ここで終わらせますので！

サヨナラ～

オッパイが……サンドイッチ……（前書き）

結構描写を飛ばしています。

分かりにくいくと思します…………すいませんとしか。

これが限界なんだよ～（泣）

## オッパイが……サンドイッチ……

「アーシアちゃんの救出完了と。」

えっと……胸元にある陣がセイクリッド・ギアを抜き取る為のモノでいいんだよな？」

俺が拭き取る……のは駄目だよなあ。

「アーシアちゃん。その胸元にある陣つて拭い取れる?」

「えつ? あ、はい、ちょっと待って下せー……んしょんしょ……取れましたあー……イッセーさん? ビリしたんですか?」

「…………こや何デモナイヨ。気にしないで……」

見えた!?

見えちゃったよ!?

アーシアちゃん……拭い取る為に……胸元をガバッと広げたから見えた!?

…………素晴らしきものです。

ピンク色の先端はとても良かつたです!?

あ、鼻血が……

「貴様ツ! ? 何者だ! ?」

ん?

何かレイナーレが言つてきてる。  
何者だ! ? 言われてもな~。

「ツレないなあ、レイナーレさんは(笑)。昨日は俺に告白してき

てくれたのに。夕日をバックに頬を染めたレイナーレさん……思い出すだけで……鳥肌が立っちゃつたよ（笑）。ぶつちやけキモかつた。」

「……その声……あなた……まさか兵藤一誠なの……？」

おお、何か滅茶苦茶驚いてる。

そりゃそうだわな。

ただの人間と思つてた奴が天井ぶち抜いて現れたと思つたら赤い鎧を着てるんだから……

「「「死ねえ……」」

おっ？

後ろの墮天使達が光の槍を。  
だが弱い。

バチイツ！

「「「なつ……」」

「ヴァイスの装甲つてかなり弱いのにそれを貫けない攻撃つて……マジよわつ。こんなでよくアザゼルとかに取り入ろうとしたなあ。めちゃ笑えるんですけど。」

「「「……」」

何か言葉にならないつて感じで驚愕してるし……あれ？チャンスじゃね？

力チャツ

照準よーし……ファイア

ドキュツ、ドキュツ、ドキュツ

ボガアツ、ズガアン、ドガアツ

「　「　「ギヤアーツ！」」

はい3名様」「あ～な～い

「なつ！？」

これで残るは1人。  
……つてはぐれエクソシスト達は？

『相棒。悪魔祓いの奴らならお前が天井をぶち抜いた時の落盤で全滅しているぞ。』

え？マジで？

何そのモブ扱い？

声の1つも無いって扱い酷いな～。

『お前が言うな。お前の方が酷いからな。』

……まいつか。

手間が省けたと考えとこ。  
つてアーシアちゃん？

なして睨んできていますか？

「イッセーさん！？何で殺しちゃったんですか！？」

「あ～……ミスつた。

アーシアちゃんならいついつのまは予想できたのに……仕方ない……か。

「アーシアちゃん。君には俺が酷い事をしてると映るだろ？けどね……俺は止めない。あいつらをここで見逃したらきっと第2、第3の被害者が出る。君はそんな事ないと言つかも知れないけど俺はそういうは思わない。ああいう手合いはね、懲りない奴らだから。」

「そんな……けど「ってな事は建前上の理由。本音は別にある。」「え？」

「そう……一番の理由は……」

「本音は……俺の大好きな友人を……可愛いアーシアちゃんを……自分達の欲の為に殺そうとした。それを見逃す事は絶対にできない……それをしたら俺が俺でなくなる。だから……あいつらに断罪を下す！？……軽蔑するならしてもいいよ。所詮やることとは殺しだから。」

「…………。」

「はは、黙っちゃったよ。

本当にこの子は……良い子だな。

だからこそ……これからは幸せな人生を送らせてやりたい。とりあえず降ろすか。

さて……

「残るはアンタ一人だな。」

俺はレイナーレに向き直る。  
動けないだろうな。

さつきから照準を合わせたままだから。

「……ふふつ……フフフツ」

？？

何だ？

いきなり笑い出したぞ？

狂つたかな？

「あははは、あなたは確かに強いわね。あなたをただの人間と侮つたのが間違いだつたわ。…………けど…出来るのかしら？」

「……何が？」

「知つているわよ。あなた……学園でよく言つてるみたいね。女が好きだと女は人類の宝だとか……そんな女好きなあなたが“女”である私を殺せるのかしらあ？」

……成る程ね。

「それにあなたって美女・美少女が大好きだつてよく叫んでるじゃない。私は自慢ではないけどそれなりに整つた顔立ちをしてるわ。身体もそれなりにね。そんな私を殺す？それともし今私を見逃してくれたら……お礼に私の身体……好きに貪つてくれていいわよ。流

「石がずっと止め無理だけね。」

。。。

「あら？ 黙つちやつたわね。それは肯定していふと想つていいのか  
しら？」

「…………イッセーさん。」

。。。

『あの墮天使…………終わったな。』

流石、ドライイグ。

よくわかつてゐる。

「なあ…………一つ…………いか？」

「何かしら？」

本当にここにいる。

「確かに俺は女好きでH口くて欲望の塊だと思つ。」

「ふふ、それじゃあ

いちいち俺の

「でもな……」

「ん？」

逆鱗に触れやがるなあ……

「幾ら女好きな俺でも腐った雌豚を抱く趣味はねえんだよ……」

「ツツー!? き、貴様アー言つて事欠いて私を雌豚扱いかアー殺す、絶対に殺す!!」

「出来もしねえことを言つてんじゃねえよーー」のまま楽に死なせてやれうと思つたが気が変わつた。灼熱の中で悶え苦しみながら逝けや。換装!!」

パアアアツー!!

「クツー!!」はやはり逃げた方が得策ね。一撃を放つた後、天井の穴から外に）やらせると思つて!? 懇りにいなさい！（バサツ

バシユツ

「ヴァイスの装甲を抜けない攻撃がアンジュルグに効くかよ、馬鹿が。」

バチイツ

最後の悪あがきつてか。

……一撃離脱しやがつた。

ははは、お逃え向きに空に逃げやがつた（笑）。  
その判断……間違いだぜレイナーレさんよ。

『相棒。追いかけないのか？逃げられるぞ？』

『まあ見てな。……空に逃げた事を後悔させてやる。』

『俺は派手なのを希望するぞ。』

はは、ドライグも好きだね～。  
まあ了解。  
んじゃまあ……殺りますか

バサア！？

両翼展開！

シユウウンッ

凸展開！

チャキッ

照準…オールグリーン！

いくぜ！？

「コード《ファンタム・フニッシュ》！…！」

キュアアアアアツ！

『ほお…火の鳥か。』

『「うー。」この武装の最大の攻撃だ。喰らつた奴は灼熱の炎で焼きぬくされ…………』

ズッゴオアアアアアアアアアアツ――！

「ギャアアツ――熱いアヅイイーツ！イア、ア、ア、ア、――――

」

『骨も残らず塵に帰る。……ちなみにお前の皮膚も焼けると黒いつ地。』

『……絶対にやめてくれ。』

使わねえって（笑）。

ん？アーシアちゃんが田をまん丸にして偶然としてる可愛いんですけど……お、何か喋るぞ

「イッセーさん……天使様だったんですかあー！？」

『……何言ひ出してんの、この可愛い子は？』

『お前の背中にある翼が原因じゃないか？』

ああ、成る程。

アーシアちゃんつたら……間違いも甚だしいな、全く……

「アーシアちゃん……一つ間違いを教えてあげよう。』

「え？」

ちやんと物事は正しく教えなきやな

「天使には美女・美少女しかいないんだ！…！」

「…………そつだつたんですかあ！…？」

そうなのです。

ちゃんと正しい事を

『相棒。ちやんと男の天使もいるからな』

俺の中ではそいつらはいらない事になつてゐるのさ、H  
A H A H A。

氣を取り直した俺は換装を解きアーシアちやんの手を引き地下祭壇  
を出た。

んだけど……

「あなた……兵藤一誠？」

「あらあら、珍しい所で会いましたわね～」

「部長……下がつてください。」

「…………。」

リアス先輩一行とエングハウントしました……やばい（汗。  
いくら廃虚となつてた教会とはいえリアス先輩の管轄地域で派手に  
ドンパチやらかしたんだ……何を請求されるかわからん……つ  
てアーシアちゃん？いきなり前に出てどうしたの？

「イッセーさんは悪くありません！？悪いのは……私です！」

…………はあ～…………全く……この子は本当に大事にしないな  
あ。

リアス先輩達もキヨトンとしてるし  
ちゃんと説明しますかね

「あの先輩。状況説明しても良いですかね？」

「えつ？……ええ、お願ひしていいかしら。」

「はいそれじ……すいません。その前に野暮用ができました。」

「？何かしら？」

「「「「？」」「」」

そんな怪訝な顔しなくてもすぐには済みますって

「…………出で」「よ。気配の隠匿がまるで出来てないぞ。」

俺は二階の大きな窓の方に向ぐ。  
リアス先輩達もそちらを向ぐ。  
そこには

「バレちつた 気配は殺してたのにねえ）。……イッセーくんだけ？やるね～」

イカレ外道神父フリードがいた。

「ブツ、あれで気配殺してたの（笑）。おまえスゲーな。その程度で自信満々にしてるのが（笑）。チヨー笑えるんですけど。それとひき逃げアタック一撃で氣絶した弱つちい神父ちゃんが何のようでちゅか～（笑）。

ブハハハツ！

フリードの奴、こめかみひくつかせて必死に堪えてやがる（笑）。ドライグ見ろよ！？

負け犬ちゃんが吠えるの耐えてるよ。めちゃ笑えねえ？

『……俺はあいつに同情するだ。本当に可哀想に……相棒と関わってしまったばかりに……』

いや同情する価値もないだろ。

「…………クククツ、ヒヤツハツハツ！決めた！オレってば絶対に決めちゃった イッセーくん……俺、おまえにフォーリンラブ 絶対にぶち殺しちゃ 「アーシアちゃん。そんな薄着一枚じゃ寒いでしょ？上着貸したげるね～。」「え？あ……ありがとうございます。」…………てめえ……」ヒトヒト舐めやがってえ……（ピクピク）

おんやあ？何か負け犬ちゃんが震えますよ？

「……小便でも我慢してゐるのか?なら早くお手洗いに行きな。ついでに小便と一緒にお前自身も流されてこよ。汚物野郎。」

「ツツツー！？ふつゝなつ！？身体が……てめえ！なにしやがった！？」

気づくの遅いわ、馬鹿が。

金縛りですが。少しばかり仙術の応用でチヨチヨイとな

後

「なつー?」

「はわあー!? イッセーさんが消えちゃいましたあーあ、上着まで…

びやん驚いてます。

ちなみに俺は今

「フリードくん 後ろ隙だらけですけど？」

「ツツ！？」

フリーードの後ろにいます。

リアス先輩達も目を見開いて驚いてますな。

驚いてるリアス先輩と朱乃先輩と小猫ちゃん……可愛いんですけど！？

「いつの間に！？」

「ん？ それは秘密……なんてな。幻術を囮に気配遮断して近づいただけです。仙術ってマジ便利。後……おまえと会話するのがこれ以上面倒だから……お帰りしてちょーだい……なつ！？」（ドガアツ）

「グハア！？（ヒューン……）

ははは、吹っ飛んでいたし。

『お前にしては優しい扱いだったな？』

『そうでもない。今の一撃で体内の氣の流れをかなり乱した。それなりの間は身体を動かそうとする度に激痛が走りまくる。あいつにやあ楽な死に方はさせないよん』

『聞いた俺が馬鹿だつた。お前はそういう奴だつたな。』

そんな褒めんな、照れる。

さてと汚物は片づけたし先輩達に状況説明しますかね。

「…………つてな感じです。これでいいですか？」

「そう……大体解つたわ。もう一ついいかしら？」

「何ですか？」

「はぐれ悪魔を退治したのもあなた?」

はぐれ悪魔……?

『お前が公園で木つ端微塵にした雑魚だ。』

ああ、そういうやいたなそんな奴。

「はい、そうですよ。レイナーレをそこへ始末しようとしたら邪魔してきたので。』

「わづ……朱乃。』

「了解ですわ（ガシツ）

「…………くつ?』

何で朱乃さんは俺の腕を掴んだの?

……いや、やーらかいオッパイがブーケンと当たつて嬉しいんだけどね!?

おや、リアス先輩?

何でそんなにニコヤカな笑顔をしてるんでせう?

「兵藤一誠くん。壊した公園の修繕費…………払つて頂戴』

…………え、。

「IJの教会を壊した件は墮天使の暴走を止めた件でキャラにしてあげましょう。でも公園の修繕費ははぐれ悪魔を討伐しただけじゃあ

……ちょっと足りないわね。だから……差し引いて残った分を払つて頂戴。」

「…………いくらですか？」

「そうね……ザツとこれぐらいかしら？」

…………。ん~、何か5桁の数字がミエマスク。  
リアス先輩を見ると……めっちゃいい笑顔で手を出してるし。  
横にいる朱乃先輩を見ると……こちらもすこくいい笑顔ですね。  
小猫ちゃん……無表情で我関せずですか……あ、欠伸をかみ殺して  
る、か~わい。

アーシアちゃん……オロオロしてる。

リア充……苦笑してやがる……シネ。

クツ……進退極まり……なんてな~。

リアス先輩……まだまだ甘いわ！

「いいですよ。払います。一応、蓄えはありますから払えますんで。  
明日払いにいきますね。」

「…………え？」

「あら?」

予想外の返事に先輩2人が驚いたし。  
はっはっはっ！

何気に俺は100万ぐらいは貯金しているのですよ。

幼き頃からエロ本やエロDVDを鑑賞して品評したハガキを投函し  
続けていたら向こうの会社がコンタクトを取ってきた時……マジ驚  
いた。

詐欺かと思った。

……ふつ、まあ昔の話だな。

詳しい事は聞くな。

それより今は

「現金一括払いでのいいですか？」

「こいつを片付けないとね。

「え……いやちょっと待って頂戴。」

ん？何か朱乃さんとアイコンタクトしている。  
何かの相談か？

あ、何か終わつたっぽい……

ぶにょ

ツツツ！？

朱乃様！？

なしてオッパイを押し付けてくるのでしょうか！？

「ねえ。兵藤くん。」

はわあ！？

耳に息を吹きかけないで！

「な、な、何でせう！？先輩！ひょわつ！？顔、ちかつ、近いです  
よー！」

「いやん。可愛い反応……兵藤くん……ううん、イッセーくんに

お願ひがあるんだけど。聞いてくれないかしら?」

「……くつ? お願いですか? ……あのオッパイ…当たつてます。」

俺の腕が朱乃先輩のオッパイに挟まれた…………!

「当てるの それでね……私達の仲間になつて欲しいんだけど。」

「当てるの だと……! ?

クッ、これは俗に言つ色仕掛けといやつか! ?  
だがこの俺はそんな程度では困はしな

「仲間になつてくれたら……揉んでもいいわよ? いえ……イッセ  
ーくんの好きにしてくれて……いいわ。」

「マジですか! ? ジャあ仲間に「イッセーさん……」アーシア  
ちゃん?」

「イッセーさん……Hな事はいけません!」

「う、……いや……でもね……朱乃先輩のオッパイがね……やめて!  
? そんな瞳で俺を見ないでエ!」

「アーシア……だったかしり?」

「ふえ? ……はい、何ですか?」

リアス先輩?

「あなたも良ければ私達の仲間にならないかしり? 仲間になつたら

……兵藤くんと一緒に過ごす事ができるわよ（一ノ瀬）

いやいやいや、その勧誘の仕方はない「なります！？」イツヤーさんと一緒にいれるなら仲間になります！」…………何言つてるの？この子は？

「ふふつ、そう。歓迎するわ。じゃあ後は……」

..... 何で近寄るんですか？

## 何で背後に？

ふにょ、ペタッ

これは！？

前方にリアス先輩、後方に朱乃先輩か！？

「ねえ……仲間になつて……イッセー。」

リース先輩の甘い声がああ…………はははは…………もひ…………いいよね？

脩……元張つた……よね……

「はい……仲間になります」

「ふふ、ありがとうございます。」

「これからよろしくお願ひしますわ、イッセーくん

」  
「うして俺は原作とは違った形だがリアス先輩の眷属悪魔に転生する」となりましたとさ。

…………そりいえばアーシアちゃん……悪魔になるつだけちゃんと理解してゐるのかね？

…………してないんだろうなあ。

おまけ

(ふう……何とか仲間に引き込めたわね)

リアスは内心でそう思つた。

リアスはイッセーの力を危険視したのだ。

彼女……いや彼女達は空で燃やし尽くされたレイナーレを叩撃した。

イッセーが放つた『ファンтом・フェニックス』を見たのだ。

あれを見たリアス達は困惑した。

威力ではない……魔力を感じ取れなかつた事に……だ。

未知の力。

それだけでも警戒に値するのに説明や質問、フリードとのやり取りで仙術まで使うのだ。

危険視するのには充分。

だがリアスは同時にこうも思った。

彼が欲しい…

と。

イッセーを眷属に出来たらかなりの戦力強化となる。

そんな思いが生まれた。

だからあんなやり取りをしたのだ。

まあイッセーが本当に危険人物なら排除も考えたのだが……

(彼……初めて見た時から私達を警戒してなかつたわね？何故？…  
…警戒するに値しなかつた？)

そう。

イッセーがリアス達と出会つても一切警戒をしなかつた。

まるでリアス達が自分とアーシアにそう簡単に危害を加えないのを知つてゐるかのように。

だからこそリアスも多少強力にでも勧誘した。

結果は先の通り、リアスの勝ち。

だがリアスはまだ知らない。

このイッセーを仲間に引き込んだのが……どれほど幸運だったのかを。

(しかし……からかい甲斐のありそつ子ね ふふふ)

リアスはまだ知らない。

このイッセーが……どれだけ自分に影響をもたらすかを。

ツバメ

## オッパイが……サンドイッチ……（後書き）

原作豆知識

### 眷属悪魔

・悪魔には階級があります。

下級・中級・上級・最上級と。

詳しいことは恐らく話しに出てきますがとにかく上級悪魔から眷属を持つ事ができます。

眷属悪魔にするには『悪魔の駒』イーヴィル・ピースを埋め込む事。

種族は問わない。

駒はチエスの駒と同じです。

女王1・戦車2・僧侶2・騎士2・兵士8です。

眷属にする相手の能力が高ければ駒消費が激しいです。

要するに兵士2個分の力を持っている相手を眷属にするには兵士の駒を2個使う……といった感じです。

ただキング…主の能力が高まれば駒を使う消費も抑える事ができる。例) 現在のリアスがイッセーを眷属にするには兵士8個分必要です。だけどもしこの時に眷属にせずリアスが修行をして能力を上げて後から眷属にしようとする駒消費が7個になる可能性がある。

といった感じです。

これについては今のリアスは知りません。

制作者の隠し要素なんです。

これもまたいつか話しに出来ます。

もう一つ。

これは今のリアスも知っている事ですが駒には『変異の駒』アーティジョン・ピースがある。

これは駒を複数使い眷属にしなければいけない相手を1つで済ます事ができるというイレギュラー。

制作者も予想外だったが面白いと理由で放置したみたいです。  
上級悪魔で駒を所持している者達は一個ぐらいはあるそうです。  
これもまたいつか出ます。

### 補足

眷属悪魔になるという事は転生するといつ意味合いだそうです。  
この世界ではそうなっている。

悪魔になれば身体能力の向上とかメリットがありますが聖属性に對しての抵抗が著しく低下する。

聖書の一部を読み上げられたら苦しくなったり聖水を浴びたらダメージを食らったりなどです。

こんな所ですかね。

……豆知識……りますか？

本編では恐らく描写とか説明とかを飛ばしたりするから書いてるんですけど……。

後説明に間違いがあれば教えて下さい。  
直します。

では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0115y/>

ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

2012年1月8日21時45分発行